

日本語母語話者の視点の捉え方と表現形式について

－ 4 コマ漫画の描写を通して－

許 明子(名古屋大学)

1. はじめに

本研究では日本語母語話者の視点の捉え方と、その視点を表す表現形式を明らかにするために、4コマ漫画によるストーリー描写の調査を行った。4コマ漫画の描写を通して、日常で起こりうる出来事や事態を話し手がどのような視点で捉え、それをどのように言語化するかについて明らかにする。本発表では、日本語母語話者が自身を主人公としてストーリーを描写する際の立場や視点、そして言語化する際の言語形式の2つの観点から分析を行う。各場面の1コマ目の描写を通して当事者としての「現場の臨場感」をどのように表現しているか。さらに、当事者として事態をどのように把握して描写しているかについて主観性を表す言語表現（益岡 1997）について分析を行う。

2. 先行研究

木村（2014：99）は現実を言語化するにあたって言語化という行為を介して、客観的現実がどのような形で主観的現実として組み立てられるかについて、慣習的な要因の一つとして、話し手が客観的現実を捉える際の認知的な「視点（perspective）」という現象に焦点をあてて対照研究の観点から分析している。木村（2014）によれば以下の2つの視点があるという。

- 「**当事者現場立脚の視点**」：話し手は、表現の対象となる現場に立脚し、当事者としての自らの視点を通して、現場に存在する事物の関係づけを行なう。話し手が現場に一実際に、あるいは概念上一立脚して現実を捉える」という視点の捉え方
- 「**傍観者俯瞰型の視点**」：話し手は現場に立脚するわけではなく、あたかも傍観者が眼下の風景を俯瞰するかのよな視点で、東西南北という絶対座標に照らして、参照点と目標のみの位置関係を捉える。このような視点の取り方を「傍観者俯瞰型の視点」とする

木村（2014）では中国語母語話者は事態認知において傍観者的な視点を取り、ステージを見る観客ごとく「ひと事」として事態を捉えるのに対して、日本語母語話者は現場立脚型の視点をとりがちであり当事者的な視点を取り「わが事」として捉える傾向が強いと述べている。

南（2015）では前述の木村（2014）の視点の捉え方を認めており、日本語母語話者の語りでは視点が主人公に固定される傾向が認められると述べられている。その結果、日本語母語話者の語りには中国語話者や英語話者より受動文の使用頻度が高く、I-JAS の会話データの分析結果から有意差が認められていると指摘している。

以上の先行研究の指摘を踏まえて本研究では日本語母語話者が話し手である自身に視点をおいて出来事を捉えた際にどのような表現形式を用いて言語化するかを明らかにすることを目的として、3つの出来事の場面を設定して描写してもらう方法で調査を実施した。

3. 調査概要

調査対象は20歳代の日本語母語話者26名であり、身分は大学生、大学院生、社会人の様々である。調査を実施する際に、被調査者自身が主人公になり、話し手自身に起きた出来事として描写するよう指示した。調査方法はZoomミーティングを使ってオンラインで実施し、4コマ漫画を画面共有しながらストーリーを考えた後、音声で述べてもらった。調査の内容はすべて録画し、描写した音声データを文字起こしした後、テキストのデータを用いて分析を行った。

本研究で設定した4コマ漫画は次の3つの場面である。各場面それぞれ①～④のストーリーになっており、それぞれの場面とストーリーは以下の通りである。（調査に使用した4コマ漫画は資料を参照されたい。）

- 場面(1)：①テスト実施中、②隣の人にテストを見られ、③テスト後に注意したが、④逆に怒られた。

- 場面(2) : ①海外から帰国してくる両親を迎えに空港に行くと両親と電話で話し, ②両親と一緒に空港からバスで街に戻ったが, ③空港にカバンを置き忘れたことを思い出し, ④空港に戻る
- 場面(3) : ①突然雨が降り出し, ②友人に傘を貸すと言われたが, ③母に迎えに来てもらうよう電話で話し, ④母に迎えに来てもらった.

調査を行う際の指示としては, 自分をマンガの主人公として捉えて表現すること, 4コマ漫画をすべて表現するように伝えた. 上記の各場面の4コマ漫画を見て, ストーリーを考えた後, 音声でストーリーを話してもらった. また, 調査後に任意で自由に感想を述べてもらった.

4. 分析結果

分析の結果, 各場面の1コマ目に話し手自身を主人公として捉えたことを表すために, 現場に立脚した臨場感を表す言語表現が選択されていることが分かった. その中には, 「～ている (ていた)」の継続を表す表現や, 話し手の視点を捉えた言語表現として「てきた」, 話し手の主観性を表す表現「一生懸命」「～てしまった」等の表現が選択されていることが分かった. 南(2015)で指摘されているように, 話し手を主人公として視点を捉えて表現する場合は受動文や授受表現等が用いられる傾向があるが, 各場面のストーリーの構成に用いられた言語表現に関する詳細な分析結果は別の機会に改めることにする.

本研究では, 木村(2013)で指摘されている日本語母語話者の視点の捉え方として「当事者現場立脚の視点」がどのように表現されているかを考察するべく, 「現場の臨場感」を捉えた表現形式と, 「当事者としての主観性」を表す「主観性述語」(益岡1997)の2つの観点から考察する.

4.1 現場の臨場感を捉えた表現形式

木村(2014:111)では「あ, 雪, 降ってる」という事実の捉え方についても「視点」が関わっているとし, 日本語母語話者は眼前の降雪を<運動の継続>として捉え, 当事者として現場に立脚した視点を取ると述べている.

本調査においても<今><ここ>の現場に立脚した言語表現が選択されており, 「～ている (ていた)」「(よ)うとすると」等の選択されていることが分かった. 特に場面(1)と場面(3)の1コマ目は主人公の置かれている現場の描写が容易であり, 場面(1)の「わたしが, ま, テストを受けています」類を選択した被験者は23名, 場面(3)の「雨が降っているんですけど」類のような「ている (いた)」の言語形式が選択した被験者は14名, 「降ってきた」類を選択した被験者が8名, 「外出しよう」として2名であり, 多くの被験者がこれらの言語形式が選択していることが分かった.¹

一方, 場面(2)の1コマ目は現場に立脚した<継続>した事実としては捉えにくい方場面であったため, 当事者として現場に立脚した臨場感は表されておらず, 「日本へ来ることになった」「～という (って) 連絡をもらった」「～というので」のような次の事態を引き起こす<変化>として捉えていた. 場面(2)の1コマ目の用いられた言語形式は「ことになる」(8名), 「～という (って) (というふうに) (というので) 連絡をもらいました」, 「～というので」, 「～という話をしました」のバリエーション(10名)であった.

さらに, 場面(1)と場面(3)では「今日は」「今」を明示し, 現場の臨場感を時間的・空間的に明確に設定して描写した被験者が2名いた. その他の現場に立脚した言語表現として場面(1)では「男の子と一緒に」「一生懸命」「難しいながらも頑張って解いていた」「テスト勉強をしっかりと臨んでから」のような当事者の状態を描写する表現や, 「夏休み前の最後の授業で」のような当事者の経験に即した時間的な描写も用いられていた.

各場面の1コマ目の現場の状況を捉えた表現をまとめると表1のようになる.

表1 各場面の臨場感を捉えた表現

| 場面 | コマ | 選択された表現 |
|-------|------|--|
| 場面(1) | 1コマ目 | 私がテストを受けています／一生懸命ですとを受けているんですけど／えー学校でテストに取り組んでいました／えー頑張ってきた勉強の成果を, テストで発揮しようというところで, テストに挑んでいます／テストを解いています／えっとテストを受けていたら／私とボーダーの服の子がですね, 一緒にテストを受けていました／えーテストを頑張っていました／テスト勉強をしっかりと臨んでから, テストに臨みました／すごい一生懸命こうテストを, がりがりやっています／テスト中, 私はえ問題を解いていると／えー夏休み前の, 最後の授業で, 算数のテストがありました／ |
| 場面(2) | 1コマ目 | ってことになって／～というので／というふうに連絡をもらいました, ～という話をしました |

¹ 水谷(2015:36)では日本の自然会話で話し手が「場」の共有を表す際に「てくる」の使用回数が多いと述べられているが, 本研究では話し手の視点を表す表現として「てくる」が多用されていることが明らかになった.

| | | |
|--------|-------|--|
| 場面 (3) | 1 コマ目 | 降っている／降っていた／降ってきた／雨宿りをしている／うわ雨降ってきた／降られてしまった／今日は／傘を持っていませんでした／傘を忘れてしまった／忘れちゃった／出ようとすると／外出しようとすると／雨が降っていて |
|--------|-------|--|

4.2 当事者として主観性述語

益岡 (1997) では、事態の認識に対する制約について論じており、日本語の人称の使用に関する制約と断定を表す述語形式について述べている。益岡 (1997: 4) によれば、「人物の内的世界はその人物の私的領域であり、私的領域における事態の真偽を断定的に述べる権利はその人物に専属する」としており、事態の真偽について断定形を用いるか非断定形を用いるかの制約が関係していると述べている。人物の内的世界を表す事態、すなわち「私的領域」がそれに該当しており、感情を表す形容詞系 (悲しい、なつかしい、愉快だ等)、願望・欲求を表す述語 (～たい)、感覚を表す動詞系 (ヒリヒリする、ゾクゾクする等)、知覚を表す動詞 (見える、聞こえる等)、認知を表す動詞 (わかる)、思考動詞 (思う、考える、感じる等)、意志を表す表現 (～(よ) うと思う) 等の表現が該当すると述べ、これらを「主観性述語」と名付けている。これらの主観性述語は話し手の固有の私的領域であり、話し手の視点を捉えた表現であると考えられ、話し手が当事者として事態を捉えて言語化する場合、主観性述語が選択される。

本調査では各場面に話し手の感情を捉えた場面が含まれており、話し手自身を当事者として捉えて描写した場合、感情を表す言語形式が用いられると予想された。本調査の場面 (1) では4コマ目で主人公が困惑している状況、場面 (2) では3コマ目にスーツケースを空港に置き忘れた事態、場面 (3) では突然の雨に困っている状況が表現されており、事態の捉え方に話し手の主観性を表す言語形式を用いることができる。分析の結果、場面 (1) では「逆に起こってきて、びっくりしました」「逆切れをしてきたので驚きました」のような受身文と感情表現を組み合わせた表現形式や、「逆切れをされてしまいました。驚きました」のような「～てしまう」と感情表現を組み合わせた表現形式が多数選択されており、半数以上の被験者が場面 (1) の4コマ目の描写に感情表現を選択していた。また、場面 (3) の1コマ目の描写には「雨に降られてしまいました」のような間接受身文と「～てしまう」を組み合わせた表現形式や「どうしたものかと困りました」「途方に暮れていると」のような困惑した状況の描写、「傘がないな～と思っていたら」のような現場にいるかのような表現形式が多数選択されていた。一方、場面 (2) は3コマ目の描写に「空港に置いてきてしまった」「忘れてきてしまった」のような「～てしまう」表現形式が選択されて非意図性を表していたが、このような表現形式を選択したのは4名のみで、場面 (1) と場面 (3) より主観性表現の使用が少ないことが分かった。

前節で述べたように、3つの場面の中で、場面 (1) と場面 (3) は話し手が当事者となり、現場に立脚した視点を取りやすく、時間的・空間的に現場の臨場感を表す表現形式が選択されやすいことが分かった。と同時に話し手の主観性を表す表現形式が選択され、話し手の感情や置かれている立場が描写されやすいことが分かった。一方、場面 (2) は場所の移動や事態の変化を捉えた描写が多く、現場に立脚したストーリーが構成しにくく、それに伴って話し手の主観性を表す言語形式の選択も少ないことが分かった。

各場面で選択された主観性表現をまとめると以下の表2の通りである。

表2 各場面の主観性表現

| 場面 | コマ | 選択された表現 |
|--------|-------|---|
| 場面 (1) | 4 コマ目 | 逆に起こってきて、びっくりしました／逆切れをしてきたので驚きました／反論されてしまい驚きました／逆切れをされてしまいました、驚きました／逆切れをされました／逆切れをしてきた／逆に怒られた／びっくりしてしまいました／すごく嫌だったんですが、～腹が立っていたので、僕はびっくりしてしまいました／怒ったんですけど、えっなんで怒るの？ってちょっとびっくりしてる／怒られてしまいました／逆切れされちゃって、なんか、困った、戸惑った／逆に怒りだしてしまって、自分は困りました |
| 場面 (2) | 3 コマ目 | 荷物をおいてきてしまった／忘れてしまった／うっかりしていたことに気が付きました |
| 場面 (3) | 1 コマ目 | 雨に降られてしまいました／途方に暮れていると／どうしたものかと困りました／傘がないな～と思っていたら／傘を忘れてしまって／傘忘れちゃった／傘を忘れてきてしまって |

調査協力者の中で6名の被験者から、場面 (1) と場面 (3) はストーリーの描写が簡単だったのに対して、場面 (2) のストーリーの描写が難しく、特に1コマ目の設定が難しかったという感想が寄せられていた。場面 (1) と場面 (3) は一定の空間を現場として設定しやすく、そこで話し手に生じた事態を当事者として捉えやすく、現場に立脚した臨場感のある描写ができたのではないかとと思われる。それに対して場面 (2) は場所の移動や事態の変化が含まれているため、空間的・時間的に話し手が当事者としてストーリーを組み立てることが容易ではなかったと思われる。つまり、場面 (1)

と場面(3)は話し手が当事者となり、他者との関係や働きかけ等を現場に立脚した表現形式が選択され、臨場感あふれる描写となっているのに対して、場面(2)はみずからの動きである点で、「当事者視点」が捉えにくかったのではないかとと思われる。

5. まとめと今後の課題

本研究では日本語母語話者を対象に、3つの場面の4コマ漫画の主人公としてストーリーを描写する調査を行った。分析の結果、事態の当事者の視点を捉えやすい2つの場面では、現場の臨場感を表すために1コマ目で「～ている」の継続の表現が多数用いられていた。また、話し手が当事者として事態を把握している場面では主観性を表す述語表現が多用され、当事者として現場にいるかのような表現形式が選択されていた。一方、状態の変化や場所の移動が含まれている場面では臨場感を表す表現や主観性述語が少なく、視点の捉え方と言語表現形式の選択には密接な関係があることが分かった。

今後は視点と授受表現や受身構文の選択の関係について分析を続けると共に、外国人日本語学習者を対象に同様な調査を行い、対照研究の観点から日本語の特徴について分析を行いたい。

参考文献

- 木村秀樹 (2014). こと・ところ・ことばー 現実をことばにする視点ー, 人文知, 東京大学出版会. pp 97-118.
 許明子 (2021). 日本語の補助動詞の使用から見る話し手の視点の捉え方. 人文学研究論集第4号. 名古屋大学人文学研究科 (印刷中)
 益岡隆志 (1997). 表現の主観性, 視点と言語行動, くろしお出版, pp1-11
 水谷信子 (2015). 感じのよい英語感じのよい日本語 くろしお出版
 水谷信子 (1985). 日英比較 話ことばの文法 くろしお出版
 南雅彦 (2015). 日本語学習者の「形」から見えてくる習熟度ー語彙・時制・視点ー, LSJ 4回目シンポジウム予稿集

【資料】4コマ漫画

